発表 2

木目に反して
―日本版画への非伝統的な探索、解釈、そしてその先にあるもの

サレル・スティーブン
ホノルル美術館　ロバート・F・ランジ財団日本美術キュレーター

略歴
シアトルのワシントン大学で美術史の修士号を取得、専門は近世日本絵画。学芸員として、アジア美術のキュレーターであるショーン・エイクマンとともに日本の春画の展覧会シリーズ、また日本のマンガ展シリーズを行った。出版物は、エイクマン博士との共著『Shunga: Stages of Desire』（Skira Rizzoli Publications, October 2014）などがある。

この発表は、ホノルル美術館での日本美術提示のための現在の戦略と、なぜそれらが日本も含め他館と異なっているかの理由に焦点を絞っている。特に、ホノルル美術館のオーディエンスとそのコレクションの成長がいかに版画コレクションを新しいやり方で探索、解釈、そしてその先にあるものを示す展覧会の発展が必要となっていったかを論じたい。

ホノルル美術館は、19 世紀後半宣教師の娘であったアンナ・ライス・クック女史によって創立された。そこは元々クック女史の家で、彼女は世界中から多くの美術品を集めた後 1927 年にホノルル・アカデミー・オブ・アーツと呼ぶ美術館にすることに決めた。

美術館のレイアウトは過去 93 年で進化してきたが、この 2、30 年作品はそれぞれの文化によって地理的に分けて配されている。美術館のアジアウイングは韓国美術室、中国美術室、日本版画室、日本美術室および汎アジア仏教作品のための部屋があり、これらすべてで中国式中庭を囲んでいる。

ホノルル美術館日本美術室

当館の来館者は 2 つのグループに分けられる：多様な民族性を持つホノルル地元の人たちと観光客である。アンナ・ライス・クックが 1927 年に博物館を作ったのはこの最初のグループの人たちに向けてであった。彼女のミッション・ステートメントには、ハワイが地理的に孤立していることによる地域の人たちが感じる文化的な孤立感を軽減したいという希望が表現された。美術館は「様々な国籍や民族の我々の子どもたちが（中略）… 彼ら自身の文化的遺産に親しみ、彼らの隣人の芸術を形作った理想に目覚めるよう（後略）」設計された。

その頃彼女が言及した住民はほとんどすべてハワイ人であったが、ホノルルの民族構成は以来劇的に変化した。住民の半分以上はアジア系アメリカ人、6分の1が白人、同じくらいが多民族で、ハワイ人は今やわずか8％である。ホノルルを訪れる観光客の国籍をみると、全く異なる割合である。半数以上がアメリカから、13%が日本から、6％がカナダからとなっている。これら二つの調査により当館への来館者は多彩な文化的背景を持って日本美術をみるということがわかる。

美術館の創始者および寄贈者の収集戦略、特に彼らの日本版画への興味は、計り知れない影響があった。最も活発な寄贈者はクック女史、作家のジェームス・A.ミッチェナー、そして日本文学者で個人の美術商でもあったリチャード・レインの3人である。クック女史は彼女が個人的に知っていた西洋人のアーティストによる近代の新版画作品を収集してそれまでの日本版画制作の定義に挑戦した：チャールズ・バーレット、エリザベス・キース、ベルタ・ラム、ポール・ジャクレである。ミッチェナーのおよそ6,000点の版画作品は、浮世絵の古典と近代日本版画を合わせたものである。中には世界最大の広重の木版画コレクションもある。レーンはとても多くの木版画本を収集した。彼のおかげで初期の西川祐信や菱川師宣らの素晴らしい版本を多く所蔵している。

ホノルル美術館の大量な日本版画コレクションについて、その全体を調査し来館者が特になじみのない作品を展示するかどうかは学芸員次第である。作家の何人かはその民族性や国民性のせいで見逃されてきた。ホノルル住民の内訳を考えると、特に社会的には妥当な判断である。2016年8月から10月に、我々は日系アメリカ人内間安理の非具象抽象版画を展示した。彼はロサンゼルスで生まれ育ち、ミッチェナーや他のアメリカ人コレクターを通じて日本に渡り東京の日本版画のコミュニティに加わった。

内間安理（1921-2000） *浜辺の歌* アメリカ、1957年 木版画、紙本着色

我々のオーディエンスは必ずしも文化的背景を共有しているわけではないが、彼らは現代の政治的議論に慣れているので、初期近代版画を現代的議論のレンズを通して解釈しようということになった。2016年2月から8月まで行った「Hiroshige's City: From Edo to Tokyo」という展覧会では、広重の「江戸名所百景」は日本の首都の都市化をみせるよう並べることができるのでは、と話し合った。この展覧会は、リトグラファーの元田久治とビデオアーティストの吉村亜也子という二人の日本人現代作家の作品でまとめているが、二人とも都市化が進みすぎた結末を論じている。

ホノルル美術館「Hiroshige's City: From Edo to Tokyo」展　会場風景　2016年2月～同年8月

浮世絵が提言するもう一つの現代のテーマは性科学と特定の文化の中のセクシュアリティに対する態度の進化である。リチャード・レインが収集した多くの春画―日本のエロティックアート―に刺激され、私はアジア美術学芸員のショーン・エイクマンと共同で、このテーマの展覧会シリーズを企画した。最初は2012年11月から2013年3月まで開催した「*The Arts of the Bedchamber: Japanese Shunga*」である。2番目の展覧会は、2013年11月から2014年3月までの「Tongue and Cheek: Erotic Art in 19th-Century Japan」、そして2014年11月から2015年3月までの「Modern Love: 20th- Century Japanese

ホノルル美術館 「Arts of the Bedchamber: Japanese Shunga」展 会場風景
2012 年 11 月 23 日～2013 年 3 月 17 日

Erotic Art」で完結した。最後の展覧会で展示した作品にはマンガ現代の視覚小説―が含まれている。

マンガというトピックは私の最後の戦略へと導いていく。明治維新以降、浮世絵の技術的伝統は新版画や創作版画運動を通して続いていた。しかし、浮世絵の大衆的な伝統は、現代のマンガにより明確にみられ、そのため私はマンガの展覧会をわれわれの浮世絵版画コレクションに続くものとして提示したのである。

ホノルル美術館の最初のマンガ展は、2016 年 8 月から 2017 年 1 月まで行われた「Visions of Gothic Angels; Japanese Manga by Takaya Miou」である。つづいて 2017 年 11 月から 2018 年 4 月には「The Disasters of Piece: Social Discontent in the Manga of Tsuge Tadao and Katsumata Susumu」 を開催した。これらは、オルタナティブマンガのジャンルで雑誌『ガロ』に掲載された二人のアーティストの作品である。現在準備している最後のマンガ展は、2021 年 3 月から 7 月の予定である。「EmPOWered! How Women Revolutionized Japanese Manga」 というタイトルを付けた。この展覧会は、少女漫画や女性漫画、それらのジャンルが日本国内外で女性の権利運動の発展をどう反映しているかを扱っている。

これらホノルル美術館の学芸的戦略は、日本国内の美術館における日本美術史へのアプローチとは確かに異なる。いずれにせよ、それらは、ホノルルのコミュニティの文化的多様性と美術館の主な支援者たちのほとんどの見識を反映する一方、日本の歴史と文化を正確かつ丁重に提示しようとするものである。